

立教大学学術推進特別重点資金(立教 S F R)

大学院学生研究

2016年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	日本文学専攻
研究代表者 (2017年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科日本文学専攻 博士課程後期課程2年	石井 花奈	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学部教授	石川 巧	印
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
研究課題	有島武郎個人雑誌『泉』の出版社・叢文閣に関する調査とその考察		
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2017年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科日本文学専攻 博士課程後期課程2年	石井 花奈	
研究期間	2016 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 198,010円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、有島武郎が晩年に創刊した個人雑誌『泉』(1921年10月創刊)の出版社・叢文閣についての総合的な調査を行い、有島が『泉』を介して限られた読者にのみ自分の作品を届けようとした背景にあるアナーキズムとの接点、および、それを支えた出版社・叢文閣の実体を明らかにしようとするものである。

従来、有島晩年の諸作品(『泉』掲載作品)は作家自身のスキャンダルとの関連性の高さゆえ、死への道程に収斂する読解が繰り返されてきた。だが、これらに貫流するのは死への欲望や虚無感よりも、むしろアナーキズムの思想であると考えられる。しかしながら、そこに描かれたアナーキズムの思想は、表面的な記述を追うだけでは十分に読み取ることができない。そこで本研究は、有島専門の出版社であると同時に左翼系出版社としての顔も有していた叢文閣に焦点を当て、その実態の究明を目指すものである。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 叢文閣 } { 足助素一 } { 有島武郎 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本年度は、これまで継続してきた(1)『泉』掲載小説の研究に加え、本研究のテーマである(2)『泉』の出版社・叢文閣に関する調査を行った。(1)の研究結果としては、有島武郎研究会第59回全国大会・特集「有島武郎個人雑誌『泉』という〈場〉」におけるパネル発表と、その内容を活字化した論文一本(編集委員会より掲載の通知あり)が挙げられる。(2)の叢文閣の調査に関しては、口頭発表や論文等の成果はまだないものの、本研究経費を利用して行った調査で有益な資料を入手することができており、近く論文として発表する予定である。以下、(1)シンポジウムにおけるパネル発表の報告、および(2)叢文閣を調査するにあたって、本研究経費をどのように使用し、それが今後どのような研究に結びついていくのかという展望を記す。

(1) ——シンポジウム(2016年6月4日 於・北海道大学札幌キャンパス)

パネル発表は「小説家であること——有島武郎「独断者の会話」論——」という題目で、最後の『泉』掲載作品である「独断者の会話」(『泉』第2巻第6号/1923年6月)の再考と、『泉』有島武郎記念号(1923年8月)に掲載された追悼文の言説分析とを組み合わせ、『泉』という〈場〉の特性を浮かび上がらせることを目指したものである。

研究代表者は拙稿「「些かの虚飾も上下もない」関係——有島武郎「骨」再考——」(『有島武郎研究』第19号/2016年6月)において、有島が「友情」(『泉』を創刊するにあたって)／『泉』第1巻第1号)を育む相手として求めた「私自身の読者」が、実は「崇拜」「敬服」「敬愛」「賛美」(「諸方より故人を悼みて足助氏に宛てたる書(七月十八日迄に着の分)」／『泉』有島武郎記念号)などの言葉で作者を形容し、超越者として位置付けようとする「有島信者」(田中純「有島武郎の甘さ」／『作家の横顔』1955年7月/朝日新聞社)とでも言うべき性質をもった集団であることを論証した(以下、田中の言葉を借りて『泉』愛読者のことを〈有島信者〉と名指す)。

パネル発表は、以上の研究結果を踏まえたうえで、晩年の有島が抱えていた大きな問題の一つはこの「私自身の読者」と〈有島信者〉とのズレではないかという仮説のもとに組み立てた。というのも、この問題は「或る施療患者」(『泉』第2巻第2号/1923年2月)を除くすべての『泉』掲載小説に作者と思いきキャラクターを登場させるというかたちで、晩年の有島に強く影響を及ぼしていると考えられるからである。

「独断者の会話」には、「作者有島武郎、という像を担う「A」が、小説家であるという自己認識の不確かさから襲い掛かる死の恐怖を、理屈なしに「小説なるものを書きなぐ」ることで生の衝動へと反転させるさまが描かれている。ところが、前述したとおりの同作からは死を見つめる「作者有島武郎、だけが取り出されることになる。このことは『泉』有島武郎記念号に掲載された秋田雨雀の追悼文をはじめ、〈有島信者〉からの書簡にも顕著に表れており、たとえば『独断者の会話』の如きは、全く彼の死に達するまでの人間苦闘史である」(秋田)、「新聞で有島武郎さんの死を知った。而して六月の「泉」を読み終へた。成る程と思つた」(青城生)などがそれにあたる。いずれも、有島の死と「独断者の会話」とが強固に結び付けられている。このことは、〈有島信者〉によって形成される『泉』という〈場〉が、諸作品に作者の死を読み込もうとする力学を発生させる磁場と化したことを物語るものである。

以上のパネル発表は議論も充実したものとなり、その成果は活字化して有島武郎研究会が刊行している『有島武郎研究』第20号(2017年6月刊行予定)に投稿した。すでに掲載決定の通知を受けている。

パネル発表および論文の成果は、これまでほとんど研究されることのなかった有島の死後に氾濫する「作者有島武郎」をめぐり言説を検討するための足掛かりをつくることができた点である。たとえば①有島の死後に頻出する「有島信者」の後追い自殺とその報道による揶揄、②多くの婦人雑誌で組まれる有島の特集、③複数の出版社による全集の刊行とその驚異的な売れ行き、④有島の情死をモデルとした戯曲の登場などが挙げられる。これらはすべて「作者有島武郎」のひとり歩きとでも言うべき現象である。

(2) 叢文閣の調査

(1)の成果は、本研究のもう一つのテーマである叢文閣の調査にも接続していく重要なものである。たとえば③の有島全集の刊行について、複数の出版社が一斉に有島全集の編纂に着手する中、いち早く刊行したのが叢文閣であった。誤字脱字は多いものの、有島の文業を早期に収集し刊行したことは大いに評価されるべき仕事であろう。

研究成果の概要 つづき

また、叢文閣は有島の著作のみならず、白樺派作家の著作なども出版する傍ら、社会主義思想の専門書なども多く出版しており、その出版事業は特異なものといえる。しかしながら、これだけの事業を展開する叢文閣に関する情報は少なく、出版史においては空白と言わざるを得ない。

そこで本研究では、叢文閣に関する情報の収集に努めた。その際、有用で手元に置いておきたい書籍や、高額で購入が難しい書籍を本研究経費で入手することができ、今後の研究に活用されることが期待されるものが多い。ここでは特に重要と思われる書籍について記す。

- (A) 岡野他家夫『日本出版文化史』(1962年7月/春歩堂)
- (B) 紅野敏郎『近代日本文学誌一本・人・出版社一』(1988年10月/早稲田大学出版部)
- (C) 『有島武郎全集』全12巻(1924年4月創刊/叢文閣)

(A) には、そのタイトルが示す通り、明治時代前期から昭和時代後期に至るまでの出版史が記されている。情報の少ない叢文閣についても言及があり、通史的な視点で叢文閣という出版社を把握することのできる貴重な資料である。

前述した通り叢文閣は二つの顔を有しているわけだが、その事業は前記と後期に大別することができる。前期が有島をはじめとする文学書中心の事業、後期が左翼的出版物中心の事業である。(A) に記されているのは後期の叢文閣である。『足助素一集』(近代日本学芸資料叢書第16輯/1993年6月/湖北社 ※初版は1931年10月/足助たつ発行) には「叢文閣出版図書目録(昭和6年9月現在)」が掲載されているのだが、やはり左翼的出版物が大部分を占めている。後期叢文閣については、同資料と(A) とを活用しながら今後も調査を継続していきたい。

(B) には、叢文閣についてよりも、その設立者である足助素一に関する事柄に多くの紙幅がさかれている。本研究は足助素一の人物像や人脈も調査対象としているため、有用な資料といえる。ただし、(B) の多くは『足助素一集』の分析・考察であるため、本研究では、足助と関係のあった人物(たとえば秋田雨雀、藤森成吉、山川均、堺利彦など)の回想記などの資料収集も行っていく。

(C) は前述した叢文閣版有島全集である。高額なものであるが本研究経費で12巻揃いで入手することができた。第1巻の編集後記には、たとえば「故人執筆にならざる談話筆記は、多くは故人の校閲を経ず、且つ内容の杜撰なるもの多きを、故人が生前遺憾に思はれたるを熟知せるがために、大部分は採録を見合せました」という、生前の有島の意向を汲み取った記載がある。これは有島専門の出版社であった叢文閣だからこそできた配慮であり、非常に特徴的である。(C) は今後行う有島死後の研究においても、叢文閣の研究においても大変有益な資料となるのは間違いない。

以上のような基礎的な調査と同時に現在着手しているのは、叢文閣出版目録の作成である。先に叢文閣の事業は前期と後期に大別でき、(A) などが後期の資料にあたりと述べたが、それは逆に言えば、前期叢文閣に関する情報は極めて少ないということである。したがって本作業は、特に前期叢文閣の事業の実態を明らかにすることに重点を置いている。具体的な調査方法は、国立国会図書館に所蔵されている叢文閣の出版物のデータ(装幀者・印刷日・発行日・発行者・発行所・印刷者・印刷所・頁数など)収集とリスト化である。それが完成してから、国会図書館に所蔵されていない書籍の調査を進め、リストの完成を目指す予定である。叢文閣の出版物を網羅的に調査し、その出版目録を作成できれば、文学研究の枠内にとどまらない学際的な研究として発展させることができると考えられる。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 石井花奈 「小説なるものを書きなぐつてゐる」こと——有島武郎「独断者の会話」論—— (『有島武郎研究』第20号、2017年6月刊行予定) ※編集委員会から掲載の通知あり

② 該当なし

③ 特集「有島武郎個人雑誌『泉』という〈場〉」パネル発表・石井花奈「小説家であること——有島武郎「独断者の会話」論——」(有島武郎研究会第59回全国大会、2016年6月4日、北海道大学札幌キャンパス)

④ 該当なし